当面のスローガン

○差別事件の糾弾闘争を強化
○全ての学校で同和教育実践を！
○全自治体で同和・人権行政を！

解放新聞

解放新聞社山口支局
〒753-0074 山口市中央1-5-3
TEL 083−923−2303
FAX 083−921−1919
編集発行人 松岡 広昭

石川県で全同教大会

初めて北陸地方で開催

第59回 全国人権・同和教育研究大会が12月23、24日、石川県産業展示館を主会場にひらかれ、全国から1万2千人が参加した。同和教育の充実・発展、人権教育・啓発の構築に向けて、各地での実践や課題について協議した。

分科会で実践報告する山口県同教の中野晴美さん（写真右）

大会の成功に向けて挨拶をする高松秀憲・全同教委員長

1日目午前中の全体会では、主催者を代表して高松秀憲・全国同和教育研究協議会委員長があいさつにたち「全同教創設以来はじめての北陸の地・石川大会開催の意味を確認し、今日の厳しい人権状況を説明、差別の現実を直視し、実践にもとづく研究協議を通して、成果と教訓を導こう」と訴えた。

地元実行委員会を代表して二俣和聖・実行委員長が挨拶し、「人権教育・同和教育に熱い志を懐いて全国から結集した多くの方々に、石川県の人々が1人でも多く出会って欲しい」「石川の地で同和教育を志す仲間の輪が広がり、その取り組みが深まっていくことを心から願っている」と語った。

特別報告に「2年1組、壁はない！」と題して、石川県同教・金沢市立港中学校の米山千幸さんが、自分自身の生い立ちと同和教育との出会い、イジメや課題を抱えた子どもたちをつないでいく教室実践の報告が行われた。

午後と2日目は9つの分科会・24分散会にわかれ、それぞれ140本のレポートをもとに、具体的な事実と実践をもとに討議した。

25日の3日目には、「総括学習会」がおこなわれ、分野別総括報告として、全同教専門委員から学校教育分野と社会教育分野の各分科会の報告がおこなわれた。

上嶋一宏・全同教常任委員から大会総括報告がおこなわれた。

上嶋・常任委員は、石川での大会の意義を次ぎの2点で確認。

部落解放運動のひろがりがなく、同和教育の認知度が低い石川の地で、16年前に県同教を結成し、そして、全同教大会が開催できたことが、まさに同和教育の可能性と展望を押し開いたということにほかならないという点。

同和教育の理念と実行が、すべての子どもたちや人々の命と人権を確立していく教育として普遍化できるのかという点。

同和教育が築いた教訓

①事実と実践で語れ、
②己のありようを振りかえれ、
③被差別の立場の子や親たちに寄り添っているのか、
④きちんと課題に向き合えているのか、
⑤自分の変わり目はどこなのか。

これまでの同和教育が積み上げれてきた教訓をベースに総括を行った。

同和教育は長欠・不就学の解決を目指して、教職員自らが、子どもや親と向き合い、学び、誇りある教育課題を見いだしてきたことからスタートした。

仲間づくり、人権・部落問題学習、学力保障、進路保障などの取り組みは、すべての子ども達に教育の機会均等を保障し、差別を許さず、人権の確立を目指す教育のあり様をしめしてきたと言える。

つまり同和教育とは、部落問題の解決に向けた取り組みを通して、子ども達が自分を価値ある存在として実感し、自分の立場と生き方に、希望と誇りを持てる教育活動をすすめてきたことにほかならない。同和教育の事実と実践にこそ、教育の普遍性があると言える。

同和教育の理念や手法が、教育の普遍として確かさと展望を示せるものとして、多くの人に届けることができるのは、「差別の現実から深く学ぶ」ということを出発としてるからである。そのことを改めて確認したい。

同和教育の事実と実践にこそ教育の普遍性がある

2008年旗開き（ご案内）

日時　2008年1月27日(日) 午前10時受付 10:30開始
場所　ホテルタナカ　住所：山口市湯田温泉 TEL:083-922-6525
内容　10:30～ 記念講演「これからの部落解放運動」
講師　組坂繁之(部落解放同盟中央執行委員長)
12:15～ 旗開き・レセプション
参加費：5000円
問い合せ　部落解放同盟山口県連 TEL083-923-2303

2008年　全国集会日程

2／13（水）～14（木）　第22回人権啓発研究集会（名古屋市）
3／3（月）～5（水）　第65回部落解放同盟全国集会（東京）
5／17（土）～18（日）　第53回全国女性集会（三重・津）
7／16（水）～17（木）　第33回西日本夏期講座（佐賀・佐賀市）
8／20（水）～22（金）　第39回高野山夏期講座（和歌山）
10／3（金）～5（日）　第42回全国研究集会（宮崎市）
11／29（土）～30（日）　第60回全同教大会（奈良市）

「みなされる差別」二つの差別事件から

「自分がエタである訳がない」

「部落出身と間違えられた」と怒り

事件の概要

昨年10月下旬、県連に宇部市在住のSさんから相談の電話があった。

再婚した連れ合いの親の葬儀で、彼女の身内から、金融業を経営していたSさんに対して、「金貸しをする人は同和の人がほとんどだが、あんたは小郡の同和の人でしょう！」と言われ、「自分は違う」と否定するものの、その後も言われ続けているので、発言をしている義理の弟夫婦に県連から指導して欲しいとの相談だった。

その後、Sさんとの面談の中で、Sさん自身も部落に対して強烈なマイナスイメージを持っており、「自分を部落と間違えられたこと」に腹をたてていたことが分かる。

また事実確認の中でも、部落を表現するときには何度も「エタ」「四つ」と四本指を出して説明をする。そのうち、「私は江戸時代より薬屋をしていた家柄で」と、家系図を持参し、これだけ由緒正し家柄なのに自分が「エタ」であるわけない、ということを何度も強調する。

部落差別が不当であり、差別発言をする彼女の身内に対して指導してくれというより、自分が部落出身者として「間違えられている」ことに対しての憤慨でもあった。

その後、Sさんと部落問題との出会いや認識を聞き取りし、Sさん自身の差別意識や誤りを指導した。

明らかになった課題

今回の相談から明らかになった以下の課題に県連としても取り組んでいく。

①「部落出身者と間違われたこと」に対する怒り

②自分の離婚調停を優位にさせるために解放同盟を利用

③聞き取りの中で、明らかになった土地差別（安い土地価格）

④不動産売買における部落の問い合わせの現実。

「自分が部落出身かどうか教えて欲しい」

部落出身だったら夫と離婚する

事件の概要

今年5月上旬、山陽小野田市住民M（八〇歳）さんが「自分が部落出身かどうか調べて欲しい」と県連を訪ねてきた。

理由を聞くと、数年前から近所の人に自分が部落出身だという噂を立てられ、差別を受けているとのこと。

具体的には、噂をたてられはじめた頃（数年前）、行き付けの美容室で髪を切ってもらっている時、他のお客さんが入ってくると、店員が四本指を出して、お客さんに、自分が部落出身だということを知らせていた。

鏡越しにその店員のしぐさを見てMさんは驚いた。

また、隣の家の人からも「よくそんな顔をして表に出られるね」と発言を受けているとのこと。

相談者のMさん自身も、部落に対して強烈なマイナスイメージと偏見を持っており、「もし本当に自分が部落出身だったら、夫や子どもに申し訳ないから、離婚する」と離婚届も持参していた。

その後、Mさんと何度も面会し、部落問題についての正しい情報提供をするなかで、現在は少しずつ、部落問題に対して正しく理解しはじめている段階である。

現在、県連としてはMさんの心理的サポートと発言の事実確認の取り組みを進めている。

同時に今後、山陽小野田市の地域啓発のあり方を追求していく。

今後の課題

①相談内容の真相究明・事実確認

②相談者自身の部落に対する強烈なマイナスイメージの克服

③山陽小野田市の同和行政・地域啓発の不十分さ

④相談者の精神的・身体的状況の配慮

「なんか変だよ、人権教育」

最終回　「新たな挑戦に向かって」

山口県人権啓発センター　川口泰司

大学を卒業して日之出地区に入り

大学を卒業したボクは、部落解放・人権研究所の啓発企画室に勤め、全国規模の人権講座や集会、啓発ビデオの作成など、人権啓発に関わる仕事をおこなっていた。

昼は研究所で働き、夜は大阪市内にある日之出という同和地区に住み、活動してきた。大学生のころは、自分が部落出身としてどう生きるのか、部落問題をどうやって地区外の人に関心を持ってもらうかというような、人権啓発的な取り組みを中心として活動してきた。

しかし、日之出では、具体的に目の前にいるムラの人たちの生活をどう守っていくのか、ということが中心のテーマだった。

日々、懸命に動いている先輩たちの姿を目の当たりにして、同和教育だけでなく、部落解放運動とは何なのかということなど、多くのことを実践を通して学ばさせてもらった。

ボクが日之出に入ったのがちょうど二〇〇二年四月だった。「特措法」後の厳しい状況のなか、低学力や荒れているムラの子どもたちをなんとかしようと、日之出の青年たちとともに、「バッチリスタディー教室」を立ち上げ、子どもたちの学習支援をおこなったり、青年部活動や支部活動に取り組んできた。

日之出での子どもたちへの学習支援の取り組みが軌道に乗ってくるなかで、三年間、勤務していた研究所を辞め、日之出の人権文化センターに勤め、教育・啓発担当として、ムラの子どもたちの学力保障・進路保障に本格的に取り組んだ。

その後、現在のパートナー出会った。おたがいの仕事や子どものことなど、いろいろ悩んだ末に、彼女の地元である山口へボクが行くことにした。こうして、大学時代から八年間にわたるボクの大阪時代が終わることになった。

山口の現実を目の当たりにして

山口県は同和教育、部落解放運動の取り組みが進んでいない。行政職員や学校の管理職と部落問題・同和教育の話をしても、大阪での「当たり前」が山口では「当たり前」でない現実を痛感させられていく。ボクがいちばん大事に思っている解放子ども会も、「特措法」時代は「学力補充学級」というかたちでなんとか一〇数カ所はあったが、現在は山口県内ではゼロという状況。多くの人が部落出身を隠し、子どもたちも立場を自覚することなく学校に通っている。

運良く、差別を受けることなく、そのまま部落出身と知らずに生きていくことができればいいが、そんなはずない。今でも部落差別は根強くある。結婚のときなどで差別を受けて初めて立場を知っていく青年も多い。

そんな厳しい状況のなかでも、少数ではあるが、本気で同和教育に取り組む先生たちや、解放運動を進める仲間たちもいた。

この目の前の差別の現実をまえにして、黙って泣き寝入りすることはできない。「外に向けている矛先をまず自分に」向けながら、自分にできる精一杯のことから、一つづつやっていくしかない。そう自分に言いきかせながら、日々活動している。